Bitter　Vacation　　“ユリカ”との夏

美位矢 直紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｂｉｔｔｅｒ　Ｖａｃａｔｉｏｎ　“ユリカ”との夏

【Ｎコード】
Ｎ４４０３Ｅ

【作者名】
美位矢　直紀

【あらすじ】
幸せにする事をユリカに約束していたケンジは、長い休暇を取ってユリカと一緒にハワイに来ていた。ワイキキ動物園。ケンジは輝きを放つ一人の女性に釘付けになってしまった。揺れる筈のない心。よぎる筈のない不安。ケンジは確かに、何かに試されていた。
なさそうでありそうな、爽やかなハッピーエンド？？ご感想等ございましたら、ブログの方までお寄せ下さい。

1・・・・僕だけの再会

乾いた風と強い日差しが戯(たわむ)れる昼下がり。
ホテルビーチコマーのプールサイド。
彩(いろど)られた絵画(かいが)の様な景色の中で、
アーモンドの瞳は僕達だけだった。

「ねえっ。」
上目遣いを添えて、
ユリカはプールの中から手招きをしていた。
僕は苦笑いと共に首を横に振った。

・・・昨日の夜あんなに汗をかいたのに・・・

「・・・・・。」
ビーチパラソルが作る日陰の中で、
僕はデッキチェアに体を伸ばし、
時折、
ユリカを穏やかに眺めていた。

・・・この爽やかさは日本じゃ難しいな・・・

「・・・・・。」
うとうとしていた僕の鼻先を、
素敵な香りが通り過ぎた。

「・・・・・。」
香りの先には、
黒いキャミソールの裾を、
膝上で風に揺らしている女性が居た。

上品なサンダルにしなやかな足首。
オレンジアッシュのナチュラルカールが美しい。

・・・顔が見たいな・・・

彼女は二つ隣のデッキチェアでキャミソールを脱ごうとしていた。

・・・黒のビキニ、似合ってんなぁ・・・

サングラスで隠れていた瞳は、
ブルーでは無かった。

・・・マジか・・・

昨日、
ワイキキ動物園で釘付けになった女性だった。

「ねっ、健二っ、入っておいでよ！」
ずっと見当たらなかったユリカが、
プールのエッジに両肘（りょうひじ）を付いてこちらを見ていた。
「・・・了解。」

ユリカはこの場所の何処（どこ）かで、
僕のサングラス越しの視線が彼女に集中している事が分かったんだろう。

僕の体はプールの中で彼女と戯（たわむ）れ、
瞳はデッキチェアに横たわる彼女と戯れていた。

「おいおい・・・。」
「えへっ。」

「止めなって。」

「・・・・・。」

ユリカは後ろに居る僕のスイミングスパッツの中に手を入れ、笑っていた。

2・・・・背中合わせの真実

「いいよ。」
「何言ってんだよ。」
「だって・・・分かってたでしょ？」
ユリカは後ろに居る僕の、
固くなったものを握ったたままだった。

「昔よくやったじゃん。」
「・・・・。」
僕は首をそっと横に振りながら、
ユリカの甘い笑顔からゆっくりと離れた。

「ねっ、誰？」

ユリカは僕を振り向かせる事が付き合う前から得意だった。

「誰って？」
「彼女。」
ユリカは僕を見つめたままそう言った。

・・・何処まで気付いてるんだろう・・・
・・・だからもう一度仕掛けて来たのかな・・・
・・・サングラスを掛けたままプールに入ってて良かったな・・・

僕は水面で両手を広げた。
言葉ではなく、
“何の事？・・・”

「・・・だって、昨日も見てたでしょ？」
ユリカはユリカなりに気を遣っていた。
声を張らない代わりに、
強い瞳で怒っている事を訴えていた。

「・・・そうだったか？」
僕は芝居の下手な役者の様に、
そんな声で、
そんな顔を作った。

・・・全部気付いてたんだな・・・
・・・動物園で彼女に見惚(みと)れてた事・・・
・・・何でユリカは、その時何も言わなかったんだろう・・・

◇

「前沢牛が食べたい。」
「ははっ、気持ち分かるけど、ここ、ハワイだぞ。」
「叶えて。」
「おいおい。」
「だって食べた事無いんだもん。」
「ふっ、ユリカさ、最近ちょっと正直過ぎやしないか、俺に。」
「だって好きなんだもん。」
「何だその答えは。」
オアフに来て3日目、
ビーチコマーでルームサービスを取るつもりだった僕は、
ユリカに拒否されて、
シェラトンモアナのコンチネンタルクラッシックでディナーの最中だった。

長い休暇を取っていた。

ユリカの指には僕が贈った婚約指輪が光っていた。

「コーヒーは?」
「いらない。」
「・・・・。」
「ねっ、DKNYに寄って帰らない?」
「・・・コーヒー飲んだらホテルに戻るよ。」
僕はそう言って彼女にクレジットカードを渡した。

「買い物終わったら電話しろよ、店まで迎えに行くから。」

「・・・健二って、優しいのかな？・・・。」
ユリカは笑顔で席を立ち、
質問なのか疑問なのか、
そんな思いを僕に投げた。

「ごめん、お待たせせっ。」

日本語が僕の後ろを通り過ぎた。
何秒か遅れて素敵な香りが通り抜けた。

「友里っ、また会ったんだって！？」
「そう！また会っちゃったの！」

真後ろの席で始まった会話は、
はっきりと僕の耳に届いていた。

「圭から聞いたんだけど、プールだったんでしょ？」
「そうなの。」
「じゃ、絶対ビーチコマー泊まってんね。」
「だと思うんだけどな。」
「一人だったの？」
「ううん、彼女が居た。」
「だよね、いるよね、普通。」
「ドキドキしながら彼の前を通ったんだけどなぁ。」

「ふーん。」

僕は敏感に反応していた。
そんな事は有り得ないと思う疑心と、
そうであって欲しい期待と、
もしそうならば、
動物園では探し得なかった、
側に居る人の姿を確認したいと思う欲望が心を貫いていた。

僕はコーヒーをもう一杯、
そっと頼めるタイミングを計っていた。

「・・・“ケンジ”って呼ばれてたなぁ・・仲良さそうだったなぁ。」
「ねぇ友里、そんなに真ん中だったの？」
「なんだよね・・昨日動物園で見た時から・・・。」
「そうなんだ。・・・でも相当だね、友里がそんな風になっちゃうなんて。」
「プールの中でいちゃいちゃしててさ・・・何だかちょっと羨ましかったな・・・。」
「ごめん、遅くなっちゃった！！」
「遅いよ圭、あんた化粧長過ぎるよ、いつも。」
「ごめんごめん・・・綾、聞いた？！」
「うん、今、聞いてたとこ。」

僕の疑問や願望や期待や欲望は、
僕の希望を遥かに超えた場所で、

しかも一瞬で解決した。
しかしその事実は、
一瞬にして新たな願望や期待や欲望を生んでしまっていた。

二杯目のコーヒーは空になっていた。

友里：「動物園じゃ彼女居ない感じだったんだけどなぁ・・・。」
圭　：「人多かったもん、分かんないよ、あれじゃ。」
綾　：「ねぇ、友里も彼の視線感じてたんでしょ？」
友里：「うん・・・だと思うんだけどな・・・。」
綾　：「彼も気になってたんだよ、きっと。友里は黙ってたら結構美人だから。」
友里：「何よ、それ。」
圭　：「奪っちゃえば？」
友里：「・・・もう一度どこかで会わないかな・・・。」
綾　：「会ったら、どうすんの？」
友里：「・・・奪う。」
圭　：「ははっ、相当だね、友里。」
綾　：「結婚してたら？」
友里：「・・・奪う。」

3・・・・見つめていたい

「ほんとに奪うつもりなの!?」
「冗談よ、冗談!!」
「ははっ!」

3人の会話は、
食事を口に運ぶ事もそこそこに繋(つな)がり続けていた。

僕は静かに席を立った。

・・・奪う、か・・・
・・・今ここで、振り向いたらどうなるんだろう・・・

僕の感情はピーキーに揺れ動いていた。

◇

カラカウア通りは昼夜(ちゅうや)関係無く色んな人種がたむろしていた。

僕はショッピングモールを形成するブティックを右に見ながら、ホテルへと戻る途中、ユリカに電話をした。

「何も買わなかったの？」
僕達は信号待ちの雑多に紛れていた。
「ううん。」
ユリカは左肘に提げていたトートバックの中からサングラスを取り出した。
「掛けて。」
ブラックフレームのスクエアフォックスだった。
「Ｍａｘ　Ｍａｒａにいたのか。」
「うん。」

「何処行くの？」
信号を渡り、カラカウアの歩道を少しだけ歩けばホテルなのに、僕は真っ直ぐ路地を抜け様としていた。
「跳ねる？　浸る？」
僕はユリカに聞いた。
「・・・跳ねた後、浸って、狂う。」
「・・・了解。」

◇

スラングが飛び交っていた。
甘い匂いと獣の匂いが充満していた。
狭いフロアに、
クラッチサウンドの効いたインストルメンタルが垂れ流されていた。
ユリカは踊り、
僕は硬い椅子に座ってラムバックを流し込んでいた。

「汗いっぱいかいちゃった。」
「いいんじゃない？」
「・・・・。」
ユリカは僕のラムバックを飲み干そうとしていた。
「・・・出ようか。」
「・・・うん。」

爽やかな風が吹いていた。
二人の頭上で光を放つ輪郭（りんかく）のハッキリとした月は、
ホテルまでの道を照らしていた。

「浸るのはカットでいいな？」
「・・・その代わり狂わせてね。」
「ユリカ、ほんとに正直過ぎるぞ、最近。」
「・・・私だけ、見ててね。」

・・・そうだったんだな・・・
・・・僕の心の中で燻（くゆ）ってる何かを察知（さっち）してたんだろうな・・・

僕はユリカの指で光る婚約指輪に目をやっていた。

◇

ビーチコマーの２Fに在るエレベーターホールに向かう為、
僕達は長いエスカレーターに乗っていた。

深夜なのに、
階下になりつつあるフロアには昼間の様に人が居た。

「お腹空いちゃったね。」
ユリカは笑っていた。
「ルームサービス頼めばいいさ。」

エレベーターホールも人が溢（あふ）れていた。

僕達は３基ずつ向かい合うホールの中央で、
最初に開く扉を待っていた。

ユリカはトートバックの中にある筈の何かを探していた。

♪♪・・・。

僕達が背を向けていた側の1基が、
扉を開ける柔らかい音をフロアに届けた。

僕はゆっくりと体を反転させた。
ユリカは何かを探し続けていた。

「ユリカ。」

僕の声はエレベーターホールに響いていた。

・・・神様は何故、試すんだろう・・・
・・・いや、神様は試したりしない筈だ・・・
・・・じゃぁこの一瞬は、何の為の一瞬なんだろう・・・

見つめていたい。

見つめられない。

“ユリカ”と声を掛けた僕の顔を、
ユリカと、
もう一人の女性が見ていた。

4・・・・許せないキス

「さっきのお店でイヤリング外したんだけど、一つ無いの。」
ユリカはエレベーターの中でもトートバックの中を掻(か)き回していた。

「ユリカっ！」

僕の後ろから聞こえたその呼び声に、
僕の右側に居たユリカは顔を上げ、
僕はユリカから“ユリカ”に顔を向け、
誰かが締まろうとするドアに手を掛けた。

エレベーターの中にいる１０人程の人達は、
その女性が乗り込むのを待っていた。

見つめられていた。
見つめ返していた。
多分僕達にだけ、
もの凄くスローな時間が流れていた。

エレベーターの中は、
僕の胸の鼓動に対して失礼な程静かだった。

僕は、
僕の目の前で僕に背を向けた“ユリカ”のナチュラルカールを見つめ続けていた。
隣に居るユリカが僕の顔を見ているのは分かっていた。
でも、
この状況で“ユリカ”を見つめている事は不自然では無い筈（はず）だ。
でも、
隣に居るユリカが、
後姿の“ユリカ”を、
動物園で、
プールサイドで、
僕が釘付けになった女性と結び付けなければの話だ。

黒いチューブトップから抜け出した両肩は上品な小麦色だった。
僕の鼻先で、
甘過ぎないスパイスの効いた“ユリカ”の香りが動いていた。

ユリカは僕の腕に巻き付いて来ていた。

・・・彼女の名前も“ユリカ”だなんて・・・

エレベーターは何度も開閉を繰り返し、
残っているのは５人だけになっていた。

僕達は左の隅へ、
“ユリカ”達は右の隅へ動いていた。

それぞれが心に何かを溜めていた。

“ユリカ”達は15Fでエレベーターから去ろうとしていた。
二人の女性は去り際に僕を見ていた。
僕は去り際の“ユリカ”を見ていた。
去り行く“ユリカ”は僕を見なかった。
隣のユリカは僕を見ていた。

◇

「・・・イヤリング・・・あった・・かい？」
2218号室の前で、
僕はポッケトの中にある筈のカードキーを探しながらユリカに聞いた。
「・・・らしくない。」
ユリカは少し不機嫌そうな声を投げて、
僕の前に出た。

「私に預けたんじゃん。」

ユリカは2枚のカードと一組のイヤリングをミラーチェストの上に置いた。

「・・・ルームサービスは？」
「いらない。」
「飲み物も？」
「いらない。」
「・・・そっか、先にシャワーか。」
「浴びない。」
「・・・一緒に浴びようって言っても？」
「やだ。」

僕は点けたばかりの煙草の火を消して、ユリカに近づいた。

「・・・どうした？」
「・・・キスして。」
「・・・・・。」
「さっき、エレベーターでキスしてた。」
「？・・・。」
「ユリカが隣に居るのに、健二と" ユリカ" は・・・目と目でキスしてた。」

この部屋の中も、
僕の胸の鼓動に対して失礼な程静かだった。

「・・・怒ってる？・・・」
「・・・・。」
「・・・心配しないで。」
「・・・・。」
「ユリカ。」
「・・・・。」
「・・・だけだよ・・・。」

5・・・・悪戯好きの神様

「ダイビング行っちゃうよ。」
「了解。」
「ね、ほんとに行かないの？」
「・・そうだね。」
「ねぇ、一緒に行こうよっ、ねっ。」
「・・・止めとくよ。」
「もう・・・。じゃぁ・・帰って来たらドライブ連れてって。」
「了解。」
「・・・ハワイなのに海に行こうとしないんだから。」
「まだ時間たっぷりあるからさ、その内行くよ。」

◇

圭子　：「友里、アラモアナ行くよ。」
友里香：「止めとく。」
圭子　：「・・・明日帰っちゃうんだよ、おみやげ買っとかなくていいの？」
友里香：「そうだけど。」
綾美　：「どうしたの？元気ないじゃん。」
友里香：「そんな事ないよ。」

圭子　：「何、そんなに気になんの？　昨日の彼の事。」
友里香：「そんなんじゃないよ。」
綾美　：「友里、あんた東京帰ったら彼氏待ってんだからね。」
友里香：「分かってる。」
綾美　：「来月結婚すんだから、しっかりしなさいよ！」
友里香：「分かってるよ・・・。」

◇

・・・同じ事考えててくんないかな・・・
・・・そんな美味しい話なんて、ないよな・・・

昨日と同じ時間に僕はホテルのプールサイドに居た。
空は青く、
日差しは強く、
風は乾いていた。

・・・あの体は罪だよなぁ・・・
・・・黒いビキニ似合ってたなぁ・・・

僕はデッキチェアに寝そべっていた。

・・・しかも名前が“ユリカ”だなんて・・・

僕は“ユリカ”に恋をしていた。

・・・会えないままの方がお互い幸せなのかな・・・
・・・もし何処かで会って、会話を交わしたら・・・

「・・・おっと・・・もうこんな時間なのか・・・。」
腕時計はユリカがホテルに戻ってくる時間を指そうとしていた。

・・・早いな・・・

「シャワー浴びなきゃ・・・。」
僕はプールサイドで、
いやな汗をかいただけだった。

◇

「なんでこんな所に居るんだろう・・・もう圭子達が帰って来る時間だ・・・。」
友里香は22Fのフロアを歩いていた。

◇

・・・何で押しちまったんだろう・・・

僕は点灯している15Fのボタンを見つめていた。

・・・降りてどうすんだよ・・・

「・・・・。」
僕はエレベーターの中から動けないまま、
閉まり行くドアに心を挟まれそうになっていた。

「!!・・・。」

・・・あれ？“ユリカ”じゃなかったか・・・今の女性・・・
・・・まさか・・・
・・・でも似てたな・・・
・・・いや、“ユリカ”だよ、きっと・・・
・・・何で降りなかったんだ・・・

二人は偶然を装い、
お互いを探し求めていた。
しかし神様はほんの少し、

二人の時間をずらしていた。

◇

「あれ？キーがない・・・。」
友里香は１５０８号室の前でバッグを弄（まさぐ）っていた。
「部屋に置いたままだったんだ・・・何やってんだろ・・・。」

◇

「あの、すいません、部屋に入りたいんですけど、キーを忘れてしまって・・・。」
「かしこまりました。お名前をお願いします。」
「長谷川友里香です。」
「長谷川様ですね、お調べしますので少々お待ちください。」
「・・・・・。」

友里香は2、３質問されていた。
東京に住んでいた。
３日前ホノルルに入り、
明日チェックアウトし、
午後の便で成田に戻る日程だった。
長谷川様と呼ばれていた。
黒いキャミソールの裾を膝の上で揺らしていた。
肩先には黒い肩紐がもう一本見えていた。
トップにひまわりを乗せたオレンジのビーチサンダルは、

上品過ぎる後ろ姿にほのぼのとした可愛さを与えていた。
忘れられない香りもしていた。

「すいませんでした。」
「ｙｏｕ'ｒｅ　ｗｅｌｃｏｍｅ．」
対応していたフロントの女性はそこだけ英語で答えていた。

「！！・・・。」

振り向いた友里香は充分驚いていた。

・・・どれ位（くらい）・・友里香の後ろ姿を眺めてたんだろう・・・
・・・今日の僕達を担当している神様は悪戯（いたずら）好きなのかな・・・

「僕もキーを部屋に忘れたまま外に出ちゃったんですよ。」
新鮮な現実に充分ときめいているのに、
僕は知り合いに掛ける様な言葉を、
落ち着いた口調で友里香に渡した。

「・・・そ、そう・・ですか・・・。」
「・・コーヒー飲みに行きませんか？」

「えっ！？」

友里香との、
本当の初対面なのに、
挨拶もせず、
僕はフランクに、
それが友里香にとっても至極(しごく)自然なのだと、
そうする事が至極当たり前なのだと、
友里香を誘った。

・・・それ位・・友里香の後ろ姿を眺めてたんだろうな・・・

「・・・あの・・・でも・・・・。」
「・・でも？・・・じゃぁ、ビールにします？」
「えっ！？・・いえ・・・」
「じゃ、エスプレッソの美味しい店にしましょう。」
「・・・・・。」

僕は会話を成立させないまま、
成立してしまった出逢いのまま、
友里香を歩き出させていた。

6・・・・充分な沈黙

「すいません、言い忘れてました。春岡健二です。」
「・・・私は・・」
「長谷川友里香さん。」
「・・・はい。」

僕達はクヒオ通りに出る途中にあるダイナーのオープンスペースに居た。

背の高いホテルに挟まれて窮屈(きゅうくつ)そうに営業しているその店は、僕のお気に入りだった。

二人の前にはＨＥＲＭＥＳ風のデミカップに入ったエスプレッソがあった。

「結婚されてるんですか？」
「えっ！？・・・。」

ダイナーに着く迄の間、
昨夜エレベーターホールで共有した数分間を想い入れたっぷりに、

しかもその想い入れに砂糖をたっぷり落とし、
“運命風”に仕上げ様としていた僕は、
友里香のその一言に急角度で現実に引き戻された。

「・・・同じ名前だなんて・・・。」
「えっ!?、あ、いえ、結婚してないですよ、僕達。」
「・・・ちょっとびっくりしちゃった・・・。」
「・・・・・。」

・・・いきなりそんなとこ突いて来るなんて・・・
・・・そうだった・・・ユリカへの言い訳も考えなきゃ・・・

「・・・あ、・・それじゃ・・婚約されてるんですね。」
「・・・ええ・・・・。」
「やっぱり・・・。・・・指輪が見えたんです、エレベーターの中で腕を組んでた時・・・。」
「・・・・・。」

・・・やっぱり?・・・
・・・それは“残念”だって事?・・・

二人の出逢いがほろ苦い思い出になる不安に揺れつつも、
僕の心は僅(わず)かな希望を見つけていた。

「偶然にしては、何度も会い過ぎですよね。」
主導権を握り返す為に、
僕は会話を強引に“運命風”に戻した。
「・・・昨日から・・・3度目？」
友里香は自分の記憶を問い掛けて来た。

・・・僕はその一言で救われたんだ・・・

「動物園で逢った事を入れれば、5度目です。」
「?・・・。」
「友里香さんの真後ろに居たんですよ。」
「?・・・。」
「昨日の夜、シェラトンモアナのコンチネンタルクラッシックで。」
「!!・・・ほんとですか！・・・。」
友里香は顔を赤くして黙っていた。
何か言いたそうで、
でも、
黙っていた。

太陽の恩恵を受け切れていないダイナーに乾いた風が吹き抜けていた。
パラソルの横ではヤシの葉がカサカサと音を立てていた。

友里香と僕の間には充分な沈黙が流れていた。

「明日帰るんですよね？」

「・・はい。」
「今度、東京で食事しませんか？」
「でも・・・。」
「・・・最近ユリカはかなり僕に正直なんですよ。だからって訳じゃないけど、僕も正直になろうと思って。」
「・・・・・。」
「確かフロントで目黒って聞こえたんですけど。」
「・・・・・。」
「それじゃ来週の土曜日、７時にホテルパシフィック東京のロビーで待ってます。」
「あの、でも・・・。」
「ごめんなさい、僕はもう戻らないといけないので。」
「・・・・。」
「今日はありがとう。それじゃ・・・。」

・・・おいおい、あれで良かったのかよ・・・
・・・彼女の事何にも聞いてないぞ・・・
・・・電話番号も教えてないぞ・・・
・・・カッコ付け過ぎじゃないか？・・・

僕は、
あんな風に彼女の前を去った事が正しかったのかどうか、
かなりの不安を抱えながら歩いていた。

・・・彼女は僕以上に何かを抱えたかもしんないな・・・

でも僕は、
二人の間に流れた、
充分な沈黙を信じていた。

7・・・・理不尽な衝撃

僕は恋愛の必然を待っていた。

「7時半か・・・。」

・・・やっぱり無理かな・・・
・・・いや、必ず来る・・・

ホテルパシフィック東京で開催された経済セミナーに参加した僕は、
その後行われる親睦会を予定通り欠席して、
予定には無かった諦（あきら）めや自己暗示をホテルのアトリウムで繰り返していた。

・・・楽しちゃいけないな・・・

ワイキキのダイナーで格好付けて申し込んだデートが、
しかも最初のデートなのに、
仕事の“ついで”の様にしてしまった自分を僕は責めていた。

・・・恋愛の神様が怒るのも当然だな・・・

天井の高い、
何処（どこ）までも広く長い空間で、
僕は容赦（ようしゃ）なく時間に押し流されながら、
不埒（ふらち）な自信だけで自分を支えていた。

・・・今日はユリカが家で待ってるって言ってたな・・・
・・・今更親睦会に戻れないしな・・・

・・・よしっ、帰ろう・・・

僕は日比谷線に揺られていた。
途中、品川駅から恵比寿まで向かう山手線の中で、
ユリカに“もうすぐ帰る”とメールを打っていた。

「!!・・・。」

「・・・本当かよ・・・。」

僕は熟視（じゅくし）したまま人波に押されていた。

・・・神様は僕に最後のチャンスを与えてくれてんのかな・・・

降り立ったホームで友里香の横顔が目の前を通り過ぎた時、僕はワイキキ動物園で初めて友里香を見た時の胸の鼓動を蘇（よみがえ）らせていた。

「すいません、ナンパしてもいいですか？」

友里香を追う様に歩いていた僕は、改札を出た後そう声を掛けた。

「！！・・・。」

友里香は現実を整理しようと、瞳で取り込んだ情報を思考回路に送り込んでいる様な表情を見せていた。

・・・どんな事があっても、会わなきゃいけない二人だったんだよな・・・

・・・これはチャンスだよな・・・ピンチな訳が無いよな・・・

僕達は駅から少し離れた筋に在るダイニングで飲み始めていた。

「ホテルまで行ったんです。でも、勇気が無くて・・・。」
“勇気が無くて”と言った友里香が、
僕には“ほっ”としている様に見えていた。

僕達の会話は、
まだ少し、
ぎこちなかった。

「しかし中目黒に住んでるとはなぁ・・・。」
「・・・・。」
「地元なんですか？」
「いえ、越して来てまだ一ヶ月位なんです。」
「そうなんですか、じゃぁ同じ感じですね・・僕もまだ２ヶ月経ってないんですよ。」

店内の賑(にぎ)やかな雰囲気に乗せられ、
酒が進むにつれ、
友里香と僕の会話は成立する様になっていた。

「・・・健二さんって、気障(きざ)ですよね。」
「えっ？」
「自信家だし。」
「・・そうですか？」
「だってハワイで何にも聞かずに去って行くんだもん。映画じゃないんだしとか思ってた。」

「ははっ、勇気要りましたよ。」
「・・・今も何だかちょっと格好付けてる。」
「・・・友里香さんが目の前に居たら、誰でもそうなりますよ。」
「ほら、やっぱり気障っ。」

・・・どれぐらい二人の相性は合ってるんだろう・・・
・・・どれぐらい二人は相性が合い続けるんだろう・・・

僕達の会話は滑(なめ)らかさを増していた。

“ブルルル・・・ブルルル・・・”
“ブルルル・・・ブルルル・・・”

・・・ヤバイな・・3度目だよ・・言い訳考えなきゃ・・・
・・・同級生にバッタリ会って飲んでたって言うしかないな・・・

「健二さん。」
レストルームから戻って来ていた友里香は、
僕のポケットの中の振動に気が付いたかの様な、
真面目な声を発した。
「はい。」
僕は少しだけ背筋を伸ばした。
「・・・私・・そろそろ帰らないと。」
「あ、そっか、そうだね。・・・じゃ、送ってくよ。」
「いえ・・いいです。私の家、ここから歩いて直ぐだから。」

「じゃぁ尚更送ってくよ。」
「・・・やっぱり気障・・・。」

・・・友里香の正直な笑顔、罪だな・・・

「ははっ、大丈夫、僕は気障で下心充分なスケベだから。」
「ふふっ・・・紳士だって言うより安心出来るかも。」

・・・友里香の罪な笑顔、正直だな・・・

「この辺でいいです。もう、直ぐそこだから。」
「・・・了解。」
「・・・待ち合わせ・・ごめんなさい・・・楽しかった・・・・。」
「こちらこそ。」
「・・・・・。」
「・・メールしてもいいかな?」
「・・・いつ?」
「・・・今夜。」
「・・・やっぱり気障。」
「?・・・。」
「何にも聞いてないくせに。」
「ははっ、そうだったね、ごめ・・」
「私も・・・婚約してるんです。」
「・・・・・。」

僕の言葉を制し、
友里香が放ったその一言は、

僕の体に衝撃を喰らわせていた。

・・・ショックを受けるなんて・・・理不尽な男だな・・・

僕達は街灯の下で、

意外と長い間立ち尽くしていた。

8・・・・事実の価値

「それじゃぁ・・この辺で。・・・メール・・待ってます。」

・・・婚約かぁ・・・

「健二さん・・・ほんとにもう・・いいですよ。」
「・・ええ・・そうですよね・・・。」

・・・酔いが醒(さ)めるってのは、こんな事を言うのかな・・・

「・・・意外に・・しつこい方・・・ですか？」
「・・友里香さん、婚約してたんですね・・・。」
「はい？？・・・あの・・・、婚約してます。」
「・・ですよね・・・。」

・・・気持ち・・・覚めないで欲しいなぁ・・・

「健二さん、困ります。」
「えぇ・・えっ！・・そうですね、メールですよね・・アドレスは・
・さっき聞いたよね・・・うん、それじゃ・・気を付けて・・。」
友里香の毅然（きぜん）とした声に立ち止まった僕は、
喋（しゃべ）り終わらない内から後退（あとずさ）りを始めていた。

「じゃ、・・おやすみ。」
僕は軽く会釈（えしゃく）をし、
踵（きびす）を返した。

・・・参ったな・・・
・・・てか、結構近い所に住んでんじゃねぇか？・・・
・・・それも参ったな・・・

友里香の事実と、
友里香と歩いた街並みが、
ユリカと歩くいつもの道筋と同じだった事も振り返りながら、
僕は目の前に迫っていた四つ角を右に曲がった。

「まさか同じマンションって事は・・・。」
四つ角から２０ｍ程歩いた所に在る自動販売機の前で、
僕は財布から硬貨を取り出そうとしていた。
「・・・ある訳ねぇか。」
派手に転がり出て来た缶コーヒーを取り出す前に、

そう独り言を括（くく）った。
僕はエントランスに続くアプローチを歩き始めていた。
自動販売機は自宅マンションの敷地内に在った。

「今晩は。」

「！！・・・。」

「・・・・。」
「えっ？・・あ、今晩は。・・・あれ？友里香さんもこっちなんですか？」
「・・・ええ・・・。」
「・・・そうですか。・・・あの・・僕は・・此処（ここ）なんで・・・それじゃ・・おやすみ・・・。」
猛烈なスピードで回転し始めた頭と、
複雑に揺れ動く心に邪魔された僕の言葉は、
充分途切れていた。

・・・まさか、な・・・

再び友里香の前で踵（きびす）を返していた僕は、

振り返る事無く不自然に歩き、
風除室のドアを開け、
オートロックを解除する基盤に向かった。

「！！・・・。」

閉まっている筈の、
風除室のドアが開いていた。

「今晩は。」

解除されたガラスのドアが両横に滑り行く音がしていた。

「・・今晩・・は・・・。」

・・・マジかよ・・・

「・・・人間驚くと、意外に声って出ないもんですね・・・。」

ガラスのドアが閉まる音がした。
鍵は基盤に差し込まれたままになっていた。

友里香と僕は、
風除室で立ち竦(すく)んでいた。

「・・・何階・・ですか？」
「・・・・。」
「・・友里香さん？」
ぎこちなさを引き摺ったまま乗り込んだエレベーターの中で、
二人は次に待つ現実に緊張を強いられていた。

「嘘でしょ！！」

・・・何が起こってるんだろう・・・
・・・そんな事ってあんのかよ・・・

・・・恋愛の神様の狙いは、何なんだろう・・・

「・・・それじゃ、僕はここで・・おやすみ。」
エレベーターを降りる前に驚くべき事を驚き終えていた僕は、
友里香の向かう先を知りたがっている好奇心を抑え、
取り敢えず気障(きざ)に振舞った。
僕は玄関ドアに続くホールを淡々と歩きながら、
ハワイで一目惚れした女性とダイナーでエスプレッソを飲み、

東京でのデートを強引に決め、
振られ、
しかしまた出会い、
やっぱり酒を飲み、
しかも同じマンションの同じ階に住んでいるという、
そんな確率の中に歴然と存在してしまった二人の事実が、
僕に取って、
いや、
友里香にとって、
一体どれ位の価値があるものなのかを考えさせられていた。

・・・神様の作為を感じるな・・・

「おう！！健二っ！！」

５０３号室から突然出て来た男は、
５０年振りに会ったとしても直ぐに名前が浮かぶだろう顔だった。
「おおっ！！勇作じゃないか！！」
「久し振りだなぁ！元気か！！」
「びっくりさせんなよお前・・・焦んじゃねぇかさ。」

・・・本当に、何が起こってんだろう・・・

「いやぁほんと久し振りだなぁ。元気にやってっか、お前。」
「ああ、元気にやってるさ。」
「何だよお前・・な、でもどう・・」
「勇作、お前、此処に・・住んでんのか？」
「ん？おっ！！何だ友里香居たのか！心配したぞ！お帰り！」
「・・・ただいま・・・。」

・・・マジか・・・友里香が僕の後ろに居るなんて・・・

「まったく・・・電話しても出ないし、あんまり遅いから探しに行こうとしてたんだぞ。」
「ごめんなさい。」
「・・ああ・・・もういいさ、無事で良かったよ。」
「・・・ね、どんな関係・・なの？」
「ん？健二か？・・同級生だよ。高校、大学と同じでさ、しかも弱い野球部でずっと一緒だったんだ。」
「そう・・・。」

友里香と勇作は、
僕を真ん中に挟んだまま会話を始めていた。

・・・頭ん中、整理が必要だ・・・

「・・・ちゅうか、健二、お前何で友里香と一緒なんだ？」
「えっ！？いや、あれだよ、ほら、たまたま下で一緒になっただけ

だよ。」
「たまたま一緒？・・たまたま一緒ってどういう意味だ？・・・そう言ゃぁさっき“焦る”とか何とか言ってたな・・・。健二、お前、まさか友里香となん・・」
「違う違う！！何考えてんだよお前！！んな事ある訳ねぇだろ！！」
「じゃ何で友里香ん家の前に居んだよっ。」
「えっ！！マッ、ジ、いや、あのさ、俺ん家なんだよ、此処がさっ！」
僕はそう言って、
割と大袈裟（おおげさ）に隣の玄関を指差した。

・・・頭ん中・・・整理が・・・必要だ・・・

「ええっ！！マジかよっ！！・・・そりゃまたびっくりだな！」
「・・・ああ、ほんとにびっくりだよ・・・。」

“ガチャ”

・・・僕達三人は、ドアが開く音がした方を一斉に見たんだ・・・

「あれっ、やっぱり居たんだ。」
ユリカはドアレバーを持ったまま、
５０２号室の玄関ドアから上半身だけ外に出して僕を見ていた。
「・・・ただいま。・・・ごめん、遅くなったな・・・。」
「そうよっ、もう帰るってメールくれてから何時間経ってると思っ

てんのっ！」
ユリカは取り敢えず僕のサンダルを履いて、
僕に詰め寄って来ようとしていた。

「ごめんな・・・。」

9・・・・止められない恋

・・・ユリカは友里香をずっと見てたな・・・
・・・友里香もユリカをずっと見てたな・・・

４人が顔を合わせた次の日の午後、
僕は社内レストランで遅い昼食を取りながら、
そんな事を考えていた。

“ブルルルル・・・ブルルルル・・・”

電話は勇作だった。

僕達は一頻り(ひとしきり)昨夜の出来事を蒸し返していた。

勇作の声は弾んでいた。

「健二、スピーチ頼むな。」
「しょうがねぇなぁ。・・・まぁ・・了解だな。」
「招待状ポストに入れといて貰うから。いいだろ?それで。」

「ああ、そりゃ全然ＯＫだよ。」
「じゃ、来月の２０日だからな。」
「了解。」

・・・友里香の婚約者が勇作だなんて・・・

「・・・勇作さぁ、お前彼女と何処で知り合ったんだ？」
「ん？何だよ突然。」
「いや、ちょっとな。」
「・・大学の野球部に川上って後輩居たの覚えてるか？あいつが友里香と同じ銀行に勤めててさ、紹介して貰ったんだよ、ま、早い話、そんなとこかな。」
「なるほど。」

・・・友里香と勇作が結婚するなんて・・・

「ところでお前らは何時なんだ？結婚式。」
「まだ決めてないんだよ。」
「何だよそれ・・・ま、いっか、決まったら即、教えろよ、スピーチの準備があるから。」
「誰がお前にスピーチ頼むって言ったよ。」
「えっ！？俺じゃねぇのかよ・・でも俺なんだろ？・・じゃ、宜しくな。」
「・・・了解。」
僕は壁に掛かっているカレンダーに目を遣った。

・・・来月の２０日って、もう一ヶ月無いじゃないか・・・

僕は勇作との電話を切った後、
シェラトンモアナのコンチネンタルクラッシックで、
真後ろのテーブルに居た友里香が、
友達に冷やかされながらも“奪う”と言った時の声を思い出していた。

◇

４人が顔を合わせた次の日の午後、
社内レストランで遅い昼食を取りながら、
勇作の声を左耳に流し込む事になる前に、
僕はユリカに電話を掛けていた。

「ユリカ、今夜跳ねて浸(ひた)って、狂わないか？」
「やだ。」
「何故？」
「ハワイからずっと、健二の事嫌い。」
「おいおい・・・。」
「だっておかしいじゃない。」
「何が？」

「何で彼女と一緒だったの？」
「それは・・昨日言った通りだよ。」
「嘘。」
「・・嘘じゃないって・・・。」
「ねっ。」
「ん？」
「結婚しよ。」
「・・・ああ、そうだ・・」
「来月。」
「・・・おいおい・・・。」

・・・ユリカは僕が思う以上に傷付いてるかもしんない・・・

「・・・な、ユリカ、その話・・・今夜俺ん家でしようよ。」
「・・・いいよ。」
「狂った後で・・いいよね？」
「何それ！」
「ちゃんとベッドから出て話すから。」
「何言ってんの！」
「じゃぁ・・・洗面台でバック？」
「意味分かんない。」
「・・それじゃぁ・・・ベランダ？」
「ばっかじゃないの！」

怒っていたユリカは、
御機嫌を取ろうとしていた僕の下らない話に付き合ってくれていた。

二人を取り巻いていた空気は和(なご)み始めていた。
僕は左耳に届くユリカの優しさに救われていた。

◇

「大丈夫？」
「ＯＫ！大丈夫に決まってんじゃん！」
僕は少々跳ね過ぎて、浸り過ぎていた。
「じゃぁ・・私、明日早いから、今夜は帰るね。」
千鳥足の僕を支えながら部屋に入っていたユリカは、
冷蔵庫からボルビックを取り出し、
口に当てていた。

「・・・あれ？・・・狂わないの？」
ソファの上で横になっていた僕は、
待たせてあるタクシーに戻ろうと、
部屋を出ようとしていたユリカを振り向かせた。
「・・・そんなに酔ってて狂えるの？」
ユリカは僕の所に戻って来ていた。
「狂え・・・る・・さ・・・。」
「・・・じゃぁね、おやすみ。」
「・・・・・。」

ユリカはゆったりとしたキスと、
たっぷりの笑顔を残し、
僕の前から去っていた。

・・・これって、幸せなのかな・・・

“♪♪・・・”
「?・・・。」

・・・誰だ?・・・

ユリカが去った部屋の中に、
誰かが玄関を開けてくれれと、
インターホンのチャイムを響かせていた。

“♪♪・・・”
「・・ユリカなんだろ!・・鍵開いてるよ!」

僕は2度目のチャイムにそう返事をした。

・・・どうして友里香が立ってんだろう・・・

「・・こんな遅くにすいません・・声が聞こえた様な気がして・・・。」
美しい姿勢だった。
「・・・あの、どうしても今夜直接お渡ししたくて・・・。」
結婚式の招待状を胸に抱いていた。

・・・酔っ払いにこの状況は辛いな・・・

「まぁ、どうぞどうぞ、上がってって。」
「いえ、此処（ここ）で・・・これ、お渡ししたかっただけですから・・・。」
「いいじゃないですか・・・コーヒー入れますよ・・・それとも、何かこう・・・DVDでも見ます？」

・・・やばい・・・相当酔ってんな・・・

「え、いえ・・・。」
「・・・あれっ？・・あーっ、そっか・・・直接渡したいとか何とか言っちゃって・・・ひょっとして・・・。」
「？・・・。」

「・・・僕を・・・奪いに来たのかなっ？」

・・・何を言ってるんだよ・・・

「・・・・・。」

「・・・ははっ、性質（たち）の悪い酔っ払いだね、ごめんごめん。」

「・・・健二さん・・・それじゃぁ私・・・帰ります。」

友里香は綺麗な会釈（えしゃく）を一つ残して、

体を反転させ様としていた。

「何故（なぜ）こんなに荒れちゃってるか分かりますか？」

・・・おい・・・もういいだろ・・・やばいって・・・

友里香は僕に背を向けたまま、

動きを止めていた。

「・・・友里香さんの声が・・・耳から離れないんですよ。」

・・・突っ込んじまったよ・・・

「何故だか・・分かりますか？・・・僕も奪いたいからですよ・・・。」

「・・・・・。」

友里香は振り返り、
僕を見つめていた。

僕は二人の間に在る空気を張り詰めさせてしまっていた。
そしてその静寂(せいじゃく)に、
僕の鼓膜は破れそうだった。

“ガチャ。”

「健二・・・。」

・・・何でこうなっちまうんだろう・・・

ユリカと友里香は玄関先で見つめ合っていた。
友里香は動けず、
ユリカは動かなかった。

・・・恋愛の神様の真意が分からない・・・

「健二っ!!何でなのっ!!ねぇ何でっ!!・・さっき私と別れた

ばかりなのに・・何でこんな事になるの！？・・・ハワイからずっと全然健二らしくないっ！！長い休みなんか取ってハワイ行かなきゃよかった！！・・・。」

ユリカの瞳はありったけの感情を浮かべていた。

「ユリカ・・・ユリカっ！！」

ユリカは家の中へ一歩も入らないまま、僕の声を振り切っていた。

「ユリカ待てよっ！！」

友里香を置いたまま、ユリカを追い掛ける為に僕は部屋を飛び出そうとしていた。

「追いかけないで！！」

・・・友里香は優しくも強い声で僕の背中にそう叫んだんだ・・・

僕は友里香の声に、動きを止められていた。

・・・ユリカと僕の壊れ始めた愛は元に戻らないんだろうか・・・

「・・・健二さん・・・。」

・・・友里香と僕の動き出した恋は止められないんだろうか・・・

最終話・・・誓うべき誠実

個性豊かな振る舞いが華やかに溢（あふ）れていた。
終わる筈（はず）の無い幸せだと全ての笑顔が信じていた。
友人としてのスピーチを終えた僕は自分の席に戻っていた。
隣には会場の雰囲気に溶け込んでいないユリカが座っていた。

◇

「追いかけないで！！」

僕は友里香の声に動きを止められていた。

友里香の声は、
呪文となって、
魔法となって、
僕の背中を捕まえていた。
決断を迫られていた。
駆け引きを始めていた。
真実を探していた。

誠実の欠片(かけら)も探していた。

◇

雛壇(ひなだん)では新郎新婦が満面の笑みを浮かべていた。
ちょっと離れた場所で、
ハワイで友里香と一緒だった友達も笑っていた。

・・・何故知り合ってしまったんだろう・・・

あの夜、
僕はユリカの隣で強烈に酔っ払いながら、
誓うべき愛はユリカだと確信していた。
でも僕は、
玄関先に立つ友里香の姿を見た時、
いやらしくも愛を欲張り、
決心を玩(もてあそ)んでしまった。
しかも戻って来てくれたユリカの真心までも見縊(みくび)り、
振り返る事も追い掛ける事も、
勿体(もったい)振ってしまった。

・・・馬鹿な男だな・・・

「・・・・・。」

僕は隣に居るユリカの、
硬い横顔に胸を押し潰されそうになっていた。

◇

「ユリカっ！・・・ユリカっ！・・・。」

電話もメールも返事が無かった。
暗い夜道を彷徨っていた。
タクシーに乗ってない事を願っていた。
酔いなんか醒めていた。
近くに居ると信じていた。
見つけ出さなきゃ駄目だと思っていた。
“じゃあね”と言って置きながら、
“じゃあね”ではなかったユリカの愛を僕は探していた。

◇

「婚約、やめよ。」

「何言ってんだよ！！」

ユリカは指輪をテーブルの上に置いていた。
僕はあの夜からずっとユリカに電話を掛けていた。

メールも送信していた。
ユリカの会社の前でユリカを待ってもいた。
でも会えなくて、
そしてやっと声が聞けて、
僕の部屋に来てくれたユリカに、
僕が伝えた最初の気持ちは、
そんな陳腐な叫びだった。

ユリカは僕の部屋に置いてある化粧品を、
下着を、
カットソーを、
叫び続ける僕を横目に、
バッグに詰め込んでいた。

「私、捨てられたのかな？」

玄関先で振り向いて、
僕に問い掛けたその声は、
どうしようも愛おしい健気な声だった。
「・・・ユリカ、あの二人の結婚式、来てくれないか。」
「・・・・・。」
「もう明日だし、今更キャンセル出来ないし、席が空く事は結婚する二人に失礼なんだ・・・。」

・・・僕は何でそんな事言ってるんだろう・・・

・・・もっと他に言うべき事、沢山あるじゃないか・・・

「・・・今でも好きよ。」

ユリカはその一言を残して、
僕の部屋を後にしていた。

◇

僕は遠くを見つめていた。

ワイキキの動物園で、
ビーチコマーのプールで、
ダイナーで、
そしてダイニングで、
友里香は眩しく光っていた。
そして今、
友里香は最も眩しく、
最も美しく輝いていた。

・・・神様は何故僕にこんな現実を突き付けたんだろう・・・

僕は、
今日一度も目を合わせてくれない雛壇の友里香と、
まだ一度も笑っていない隣のユリカに心も体も挟まれていた。

・・・友里香はもちろん、ユリカにも幸せになって欲しい・・・

「ユリカ・・・。」
「・・・・。」

「聞いて欲しい。」
「・・・・。」

「愛してる。」

僕の瞳を、
ユリカは見ていてくれていた。

「・・・愛してる・・・ユリカを幸せにしたいんだ・・・。」

「・・・待ってた・・・。」

「・・・待ってたんだ・・・。」

「・・・毎日電話くれて、毎日会社まで会いに来てくれて・・・私・
・幸せだった・・・。」
「・・・そっか・・・。」
「・・・私には健二しかいないって、ずっと思ってた・・・。」
「・・・・。」
「あの夜、追い掛けて来てくれた事、知ってたよ・・・。」
「そっか・・・。」
「健二の声が聞こえたから、隠れてた。」
「・・・そっか・・・。」
「嬉しくて泣きそうだったから・・・意地悪しちゃった・・・。」

・・・ユリカはそう言って、僕に微笑んでくれたんだ・・・

「・・・昨日・・・指輪外して帰ったのも？・・・。」
「・・・自分を・・・試したの・・・。」
「・・・そっか・・・。」
「でも怖かった・・・ほんとに元に戻んなくなったらどうしようって・・
・。」
「・・・・・。」
「だからつい言っちゃったの、“今でも好きよ”って。」

「・・・ごめんな・・・。」
「・・・健二、ちょっとこっち来て。」
・・・ユリカはそう言って僕の顔を近づけさせたんだ・・・

「・・・愛してるよ。」

・・・何ていう瞬間なんだろう・・・
・・・どうしてこんなに心が洗われるんだろう・・・
僕は婚約指輪をポケットから取り出していた。
ユリカは優しい瞳で僕を見つめてくれていた。
「マドモアゼル、左手の薬指を僕に預けて戴(いただ)けますか？」
「・・・気障(きざ)なんだから・・・。」

ユリカは照れていた。

僕は同じテーブルに座る同級生達に冷やかされていた。
穏やかに、
ささやかに、
微笑ましく、
ユリカも冷やかされていた。

◇

「ユリカ、飲みに行こう。」
「いいね、それ。」

二次会を終えた街頭だった。
僕達には出逢った頃の様な笑顔が戻っていた。
「ブラックベルベットで乾杯しよう。」
「ブラックベルベットって？」
「大切な女性に、誠実を誓う時に飲むカクテルだよ。」
「ははっ、ほんとに気障が戻って来たね・・・大好き。」
「・・・ありがと。」

「ユリカ、ハワイ行って良かったろ？」
僕は、
ほろ苦い休暇をくれた神様に感謝していた。
「・・・ねぇ健二、今夜跳ねて浸（ひた）った後、狂わない？」
「・・・了解。」

・・・・・・・・・・・・〈THE END〉・・・・・・・・・・
・・

主な登場人物紹介

◇春岡　健二

東京都世田谷区出身　３０歳
情報システム開発会社勤務
旅行好き
高校時代は野球部のキャプテン

◇藤沢　ユリカ

東京都大田区出身　２５歳
旅行代理店勤務
感覚派
勤務先の窓口で健二と出逢う

◇長谷川　友里香

神奈川県相模原市出身　２７歳
都銀勤務
同棲経験有り
職場では人気の的

◇仁科　勇作

東京都北区出身　　　　　３０歳
私立高校教諭
努力家
大学時代は野球部のキャプテン

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

最後までお付き合い頂き、ありがとうございました。

感想、書評などございましたら、
お気軽にお寄せ下さい。
お待ちしております。

美位矢　直紀

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4403e/

Bitter　Vacation　　“ユリカ”との夏

2010年10月10日02時02分発行